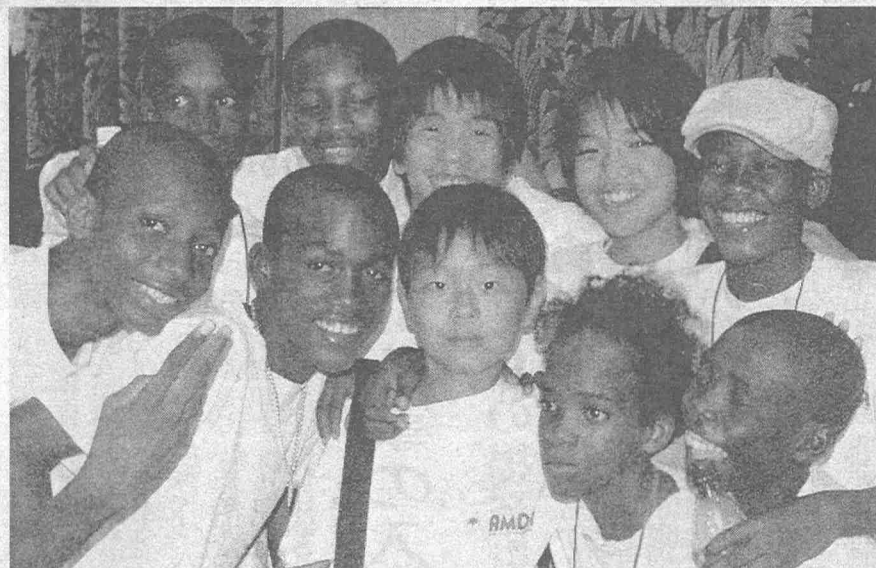


# 震災特集

# 「お金だけが支援じゃない」

肩を組むハイチと日本の少年たち。前列中央が伊藤君、右端がファブリス君。ドミニカ共和国サンクトミンゴで



## ハイチ大地震

23万人以上が犠牲になつたとされる今年1月のハイチ大地震で緊急支援を行った国際医療救済団体「AMD A」（本部・岡山市）が先月、ハイチの隣国ドミニカ共和国の首都サンクトミンゴで日本、ハイチ、ドミニカの3カ国の少年たちを招いて親善交流サッカーを行った。被災地でテント生活を続けるハイチの子どもを励ますことが目的。

参加した日本の中高生はハイチの厳しい現実を知り、「本当の支援って何だろう」と考え始めた。

【石戸諭、写真も】

## 国境超え友情パス

AMD Aはハイチ大地震発生直後に緊急医療チームを派遣。手足を失った被災者が多かったため、その後、現地の病院と協力して義肢製作工房を設置するなど支援にも取り組んでいる。方で、菅波茂代表は「地震で精神的に傷ついた子どもにも支援が必要」とサッカー交流を企画した。地震後8カ月のハイチの復興状況について、今年5月から現地

で活動を続けるAMD Aの義肢装具士、八尾直毅さん(30)は「何も変わっていない」と語る。倒壊した家は放置され、若い女性も人目を気にせず路上で用を足し、ゴミの山が続く。被災テントで過ごす被災者は150万人以上、復興のために政府は機能していないように見えるというのだ。

ワールドカップ(W杯)出場経験もあるハイチで人気の高いサッカーだが、グラウンドなども避難所となっていて、子どもが楽しめる環境にないという。ドミニカでのサッカー交流に参加したハイチチームの少年16人もほとんどがテント暮らしだ。ファブリス・ヴ

イドリ君(11)は学校帰りに被災した。突然グラグラと地面が揺れ、体が動かなくなつた。今はバス運転手の父、母とともに首都ポルトープランスのテントで暮らす。ファブリス君は地震の話をする時、声が小さくなり、親指のつめをかむ。学校にも通えない状況が続いている。ハイチに帰る前夜、「帰りたく

ない」と涙を浮かべた。「雨が一番、嫌。テントの中を水が流れる」という避難生活。「ご飯もボールも無いし、友達になった『13番』と別れたくない」とつぶやいた。別れの日、大阪府、岡山県、広島県から参加した日本の中高生18人の一人、背番号13番の伊藤遼祐君(12)大阪府箕面市にはファブリス君と固い握手を交わした。ハイチチームには涙を流す少年もいた。



①ハイチチームと日本チームの交流を促すフレデリックさん(右端)  
②ハイチの被災キャンプ—AMD A提供



の厳しい現状について、八尾さんから説明された。それでも、一緒にプレーしたハイチの少年が「(宿舍に)天井がある」と喜んでいたり、それは衝撃を受けた。それから伊藤君は「支援は『頑張っ』と声かけるとか、お金渡すだけじゃないと思うねん。元気つけるって簡単やない」と考え続けている。

ハイチチームを引率した歯科医、マック・ケビン・フレデリックさん(37)は岡山に留る現状を「国が壊れている」と憂えた。復興を最大の争点にした11月の大統領選を控え、「支援には感謝したい。でもハイチは援助に頼り切っている。これを機に、自分たちのハイチを—から作り上げた。将来を担うのはこの子たちです」と静かに語った。

### 被災地からのメッセージ

パキスタン洪水被災地の子どもを診察する小倉健一郎医師(手前右) 8月26日撮影、小倉さん提供



パキスタン大洪水の被災地に8月下旬、NPO法人「災害人道医療支援会」(HUMA、東京都)の初動調査チームの一員として入りました。インダス川沿いに同国北西部から南部まで広大な被災地が広がり、全土の被災者は1800万人、死者は1700人以上と現地では報道されていました。調査は首都イスラマバードから車で2時間のカイバル・パクトゥンクワ州ノシエラ県で実施。看護師、調整員と3人で病院や避難所を回りました。地震時のような外傷のある被災者はいませんでしたが、下痢、結膜炎などの感染症や皮膚病が深刻

### 災害人道医療支援会

### 医師 小倉健一郎さん

## パキスタンに関心を

でした。HUMAは今月上旬から被災を免れた駅舎で1カ月の診療活動を始めました。同県は農村地帯で、ほとんどの家は日干しレンガで建てられた平屋です。堤防のない川が増水して水浸しになり、6万3000棟が全壊、7万棟が部分損壊、家財道具被害も深刻です。県人口110万人中60万人が被災し、死者24人、行方不明は138人でした。食料やきれいな水が不足し、家の確保も必要です。今回の洪水はパキスタン史上最悪と言われています。メディアも含め、日本の皆さんに被災地への関心をもっと持ってほしいと思います。